

# 《国語》枕草子（まぐらのそうし）プリント①

## 枕草子

### 清少納言

#### 第一段（原文）

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなど、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず、霜のいと白きも、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

#### 第一段（現代語訳）

春はあけぼの（がよい）。じよじよに白くなつていく、山ぎわ（山に接している空）が少し明るくなつて、紫がかつた雲が細くたなびいている（その景色がよいのだ）。

夏は夜（がよい）。月が明るいころ（満月のころ）は言うまでもなく、闇のころ（新月のころ）であつても、ほたるが飛びちがっている（その光景がよいのだ）。また、ただ一匹二匹などと、ほのかに光つて飛んで行くのも趣がある。雨などが降るのもよい。

秋は夕暮れ（がよい）。夕日がさして山の端にたいへん近くなつているところに、からすがねぐらへ行くこととして、三羽四羽、二羽三羽などと飛び急ぐ、そんな様子さえもしみじみとした情趣がある。まして、雁などの連なつて飛んでいるのが、非常に小さく見えるのは、たいへん趣が深い。日が暮れてから聞こえてくる、風の音や虫の声なども、また言うまでもないことである。

冬は早朝（がよい）。雪が降っている朝は言うまでもなく、霜がたいへん白い朝も、またそうでなくても、非常に寒い朝に火などを急いでおこして、炭を持って運びまわるのも、たいへん似つかわしい。（しかし、）昼になつて、寒さがゆるんでくると、火桶の火も白い灰がちになつてよくない。